



Title	余暇活動と主観的幸福感の関連に関する研究—余暇活動の機能に着目して—
Author(s)	Wang, Can
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105378
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (W A N G C A N)	
論文題名	余暇活動と主観的幸福感の関連に関する研究 —余暇活動の機能に着目して—
論文内容の要旨 本博士論文は、余暇活動が主観的幸福感にどのように関連するのかを明らかにするため、余暇活動がもつ認知的・身体的・感情的・社会的機能に着目し、その測定、妥当性、一般化可能性、さらに活動レベルでの機能特性の推定を体系的に検討したものである。幸福感到関連する余暇研究は多く存在するが、従来の研究の多くは活動の種類や頻度といった量的指標に依存しており、活動が個人にもたらす効果を多面的にとらえる「機能的側面」は十分に扱われてこなかった。本論文はその課題をふまえ、筆者が修士課程で開発した「余暇活動の機能尺度」を用い、4つの研究を通じて機能的側面から余暇活動の意義を検討した。 研究1では、余暇活動の機能尺度の因子構造を高齢者の大規模データに基づいて検証し、認知的・身体的・感情的・社会的の4因子構造が妥当であることを示した。研究2では、この4側面が幸福感到主観的健康感と異なる関連パターンを示すことを明らかにし、余暇活動が幸福感到寄与するメカニズムは側面ごとに異なる経路をもつことを示した。 研究3では、若年層・中年層・高齢者に対して多母集団確証的因子分析を実施し、因子構造と負荷量の不変性を確認することで、余暇活動の機能が世代横断的に共通する心理構造であることを示した。一方で切片不変性は成立せず、因子平均の直接比較には慎重が必要であることも示されたが、機能的側面が世代を超えて適用可能な概念であるという理論的基盤が強化された。 研究4では、活動ごとの機能パラメーター（活動固有の機能特性）を年齢層別に推定し、活動レベルでの機能的特徴を定量化した。活動ごとの標準化得点の平均を算出した結果、活動によって認知・身体・感情・社会的側面の強さが大きく異なることが示された。例えば、ウォーキングや畑仕事は身体的機能が高く、読書や学習活動は認知的機能が高いなど、活動の機能的プロフィールが可視化された。また、推定したパラメーターと個人レベルの機能スコアの関連から、活動パラメーターの妥当性が確認された。 総合的に、本論文は、余暇活動を「種類」や「頻度」から評価する従来の枠組みを拡張し、活動がもつ多面的な「機能」を軸に余暇活動と幸福感到関連を説明する理論的基盤を提示した。さらに、機能尺度が多様な年齢層に適用可能であること、加えて各活動の機能的特性を定量化できることを示し、余暇活動研究に新しい分析枠組みを提供した。本研究の知見は、余暇活動が幸福感到寄与するメカニズムの理解を深めるとともに、今後の比較研究や応用研究に向けた理論的枠組みを提供した。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (W A N G C A N)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	権藤 恭之
	副 査	准教授	中川 威
	副 査	教授	篠原 一光

論文審査の結果の要旨

WANG CAN氏の博士論文「余暇活動と主観的幸福感の関連に関する研究—余暇活動の機能に着目して—」は、「余暇活動の機能」という新たな概念的枠組みを提示し、若年層から高齢者に至る幅広い年齢層を対象に余暇活動が主観的幸福感に及ぼす影響を多角的に検討した実証研究である。本論文の学術的意義および新規性は、主に以下の4点に集約される。

第1は、余暇活動の評価指標として、従来の活動内容や実施頻度といった外面的な指標に代え、活動を通じて個人が享受する効果である「機能」に着目した点である。修士課程から継続して開発してきた「余暇活動の機能尺度（認知的・身体的・感情的・社会的の4側面）」を用い、その因子構造および妥当性を再検証することで、余暇活動を測定可能な「機能」として捉える分析的基盤を確立した意義は大きい。

第2は、高齢者を対象に、余暇活動の各機能と主観的幸福感・主観的健康感との関連構造を解明した点である。本研究は、余暇活動の評価に関する先行研究では十分な検討がなされてこなかった「感情的機能」を独立した構成要素として明確に定義した。その上で、感情的機能が他の機能に比して主観的幸福感と最も強く関連することを実証しており、余暇活動が幸福感到に寄与する心理的メカニズムの一端を明らかにしたといえる。

第3は、余暇活動の機能尺度における「測定不変性」を、若年・中年・高齢の3群間で厳密に検証した点である。分析の結果、因子構造や因子負荷量の等価性は確認されたものの、切片不変性は成立しないことが示された。これにより、余暇活動の機能は世代を問わず同一の構成概念として測定可能である一方、得点水準の単純な群間比較には慎重な解釈を要することを示唆しており、方法論的に重要な知見を提供している。

第4は、本尺度を応用し、具体的な余暇活動種目ごとの「機能パラメーター」を推定した点である。活動レベルで機能を定量化し、その特徴を整理した試みは、余暇活動研究における分析単位を個人の属性から活動の性質へと拡張するものであり、今後の実践的な活用も期待される。

論文の構成は全6章から成る。第1章で先行研究の課題を俯瞰し、第2章から第5章にかけて上述の4つの課題について実証的な検討を行い、第6章の総合考察において、本研究の成果を老年学および心理学の観点から統合している。

以上のように、本論文は「機能」という独自の視点から余暇活動を再定義し、主観的幸福感との関連を精緻な統計的手法を用いて明らかにしたものであり、心理学・老年学・人間科学の発展に寄与する優れた研究であると認められる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判定した。